

4 番組解説

1 放送局

ラジオ関東、中部日本放送、近畿放送及びRKB毎日放送の4局で放送が行われた。司会者の宇井昇がなつメロ愛好会の会報に3度にわたり同番組に関する記事を寄せている(第6号:昭和45年3月15日発行、第19号:昭和47年5月20日発行、第22号:昭和47年11月10日発行)が、いずれにおいても4局ネットで放送したとの記述となっている他、木村孝雄自費制作LP同封③の記載もこの4局のみとなっており、これ以外の放送局からは放送されなかったと断定してよいであろう。

前掲宇井昇の記事(会報第19号及び22号)には、ラジオ関東がキーステーションであったと書かれており、4局の中で一番放送日が早かったのもラジオ関東であるが、第178回以降の放送を続けたのは近畿放送のみとなっている。

なお、木村孝雄自費制作LP同封②にラジオ関東の広中雅幸が記事を寄せているが、この記事によると彼が番組プロデューサーであったとのことである。一方で、最終回の第478回音源では、担当ディレクターは近畿放送の別の人物が紹介されている。これらを考慮すると、4局放送時の第177回まではラジオ関東が番組制作を担当していたが、近畿放送のみでの放送となった第178回以降は番組制作が同局に移行したものと推察される。

2 スポンサー企業

スポンサー企業は、京都市に本社・工場のあるシンポ工業株式会社(現・日本電産シンポ株式会社)である。木村孝雄自費制作LP同封④に収録されている同社取締役社長の中溝二郎による「ごあいさつ」には次のように記されている。

ごあいさつ

皆さまにはますますご健勝のこととおよろこび申しあげます。

当シンポ工業提供ラジオ番組「この歌あの人」には放送開始以来、格別のご愛聴と暖かいご支援をいただき、深く感謝いたしております。

かえりみますと、昭和43年11月、当社の発案企画によって放送開始してから早や6年——ラジオ関東(RF)・中部日本放送(BCB)・近畿放送(KBS)・RKB毎日放送(RKB)の4局をネットで当社の提供で放送してまいり280週に達する長期番組「シンポのこの歌あの人」として現在も続けております。(47年4月より近畿放送のみ放送中)。

この間、聴取者の皆さまから寄せられたお便りには実に10,000通を超え、この中にこめられた貴重なご意見など、企画構成面でできるかぎり反映させたつもりでございます。また貴重なSP盤を快よくご提供くださったレコードコレクターの皆さまや、終始陰の力となって面倒をみていただいたラジオ局の皆さまがたのご協力も忘れることができません。あわせ感謝の念を捧げるものです。

さて、かねてご愛聴の皆さまから熱望されておりました放送番組の「カセット」化について、当社では何とかご要望にお応えしたいと、この実現のため各方面と折衝してまいりましたが、今般関係各位のご協力により、第1篇制作が完了いたしました。

第1篇はとくにご要望が多かった東海林太郎集を企画、東海林さんご出演の13週の中から、その思い出と歌ころのエキスを収録いたしております。

この一篇が皆さまに歓迎されるものとなりましたら、生前とくに当社番組にご関心ご協力いただいた東海林太郎さんへの報恩のしるしになるものと、当社としても嬉しいこととさせていただきます。

「東海林太郎の名唱とその語り」を収録した本篇は、2度と聞けない貴重な録音版だと存じます。どうかこの機会をお見逃しなきよう、おすすめかたがたご案内申し上げます。昭和49年 春

シンポ工業株式会社
取締役社長 中 溝 二 郎

● 内容紹介 木村孝雄 (シンポ工業(株)広告宣伝課長)

A面

1. 赤城の子守歌 / 佐藤惣之助作詩・竹岡信幸作曲 昭和9年2月発売・ポリドールS65-A

「流行歌手・東海林太郎」の名を不動のものにした記念すべき大ヒット作。ときに満35才。作曲者竹岡信幸氏は「この作曲には大変苦労しました。夜更けも忘れて作曲するんですが、背もたれにいた壁は、兵児帯の結びの隙れでぞらざらに傷むくらい熱中していました。母が、困った道にはいったものだと嘆いていたものこの頃でこの歌はピアノを山田栄一氏、バイオリンを桜井潔氏が担当しています」と。

なお、東海林さんはこの「赤城の子守唄」以前にニクター、コロムビア、キングなどで50曲以上歌込んでいたといわれます。

語り：自分の心の中にオペラを作ろうと思っていたが、男の泣く唄だと教えられて苦慮する新人東海林。そして開眼一番、マイクから片腕一本離れ、腹の底から絶叫したという。

2. 旅笠道中 / 藤田まこと詩・大村龍彦作・編曲 昭和10年4月発売・ポリドール2152-A

藤田・大村・東海林の絶妙トリオが作りあげた股旅歌謡の大傑作。このトリオのうちに「博多小女郎浪旅」「お駒恋姿」「麦と兵隊」などの名作が誕生するのですが――

哀調を帯びた独特の歌唱法はまさに東海林太郎の独壇場です。とくに歌謡の結び「風のまにまにに 吹きさらし」の(さらし)、あるいは2番の同じく「たよりなきに」に表現される絶妙の小節は、この原盤では認めにくいですが、その後つねに研究され、後年その歌込みにごまかすすすすをみせた東海林ぶの極致でした。

語り：明治31年12月11日秋田市に生れ、早稲田大学商学部卒業後満鉄に入社、鉄道の図書館長にまで昇進した彼が、なぜその要職までつけて歌謡界に入ったか――そのいきさつが語られる。

3. 忠治子守歌 / 野村胡堂作詩・服部逸郎作曲・細田定雄編曲 昭和13年2月発売・ポリドール2121-A

これは、ハイ・バリトン歌手東海林の真髄を披露した快心の一作。作曲は服部逸郎(レイモンド・服部)。作詩は服部との名コンビ野村胡堂。当時「国境の町」や「妻恋道中」などを作曲した鬼才阿部武雄をコロムビアに引抜かれ、苦慮最中のポリドールに「僕にも出来るかもしれないよ」とその期待にみごと応えた服部逸郎の秀作です。「東海林太郎の声の限界まで使ってみようと思い、バリトンの一番下のAの音から、上のGの音まで、約2オクターブにわたって使ってみた。歌込に際し、上のGの音は無理に歌わなくてもよいと言っておいたんですが、それをきれいに歌ってくれて……これのヒットは東海林さんのおかげです」と服部逸郎氏は控え目に語っていましたが、服部氏は48年8月他界しました。

現在でもアメリカで楽譜が売れているほど「すぐれた作曲」であり、歌手なら一度は試みたい「憧れの歌」でもありましょう。

語り：忠治子守唄は歌手泣かせの歌だ、毎日発声練習をして歌わないとこの歌は死ぬといひ、亡き母が最も好んだ歌だといひ「太郎 この歌はエエねえ」と秋田弁が飛び出す。

4. 名月赤城山 / 矢島龍児作詩・菊地博作・編曲 昭和14年11月発売・ポリドール2843

「赤城の子守唄」「忠治子守唄」についての東海林太郎赤城シリーズの第3作——横笛の名目日光の円蔵と国定忠治との男の友情をみごとにうたいあげた哀愁切々の名作。

作詩者矢島龍児は今次大戦で散華し、東海林のピアノ伴奏者として知られた作曲家菊地博も戦後病に倒れ不慮の人となってしまいました。

発売は14年の晩秋、同時発売の田端義夫の「大利根月夜」とともに一世を風靡し、満天下の若人に愛唱されたものです。現在でも歌われ続けている東海林太郎永遠のヒットナンバーです。

語り：「昔とそっくりだ」の裏のこぼれは、この道40年何も進歩がなかったことに等しく、むしろ馬鹿にしたことばだ。今はもっとうまく歌っているし、歌の難しさが今になってよく解ると新境地への心意気をひかせる。

5. 麦と兵隊 / 藤田まこと詩・大村龍彦作・編曲 昭和13年12月発売・ポリドール2887

昭和13年、作家大野赤平が一兵卒として従軍の中国戦線から書き送った「麦と兵隊」を陸軍報導部が検閲して「改造」に掲載——この原作をもとにしたこの歌が生れるのですが、作詩の藤田まこと氏はそのいきさつについて――

「改造のゲラ刷りが軍の方からすぐ回ってきて、これを書けというんです。原稿の中に、除州が陥ちた朝方、あゝ生きていた。生きていた。お母さん、生きていた」ということがあり、これをぜひ詩に残したくて書いたんですが、これじつは戦時歌だと叱られて、書き改めたのが今の詩です。昭和14・15年にかけて、見知らぬ兵隊さんから300通くらい手紙をいただいた思い出の歌です」と。この「麦と兵隊」を皮切りに、東海林太郎だけでなく「七と兵隊」「芋と兵隊」「馬と兵隊」など多くの作品が残されています。

B面

6. 国境の町 / 大村龍彦作詩・阿部武雄作曲・細田定雄編曲 昭和9年10月発売・ポリドール2121-A

この名作が世に出るきっかけをつかったのは詩人藤田まことです。ある日、円タク(1円タクシー)で藤田宅へ乗りつけた男がいました。コルテンのよれれズボンに黄色に汗ばんだランニングシャツ一枚、腰に縄の帯を巻いて、ささくれたバイオリン丁をかかこんだ異様なスタイルのこの男こそ、阿部武雄その人だったのです。

木村孝雄自費制作LP同封④ (A氏所蔵)

かえりみますと、昭和43年11月、当社の発案企画によって放送開始しましてから早や6年——ラジオ関東（RF）・中部日本放送（CBC）・近畿放送（KBS）・RKB毎日放送（RKB）の4局をネットに当社の提供で放送してまいり280週に達する長期番組「シンポのこの歌あの人」として現在も続けております。（47年4月より近畿放送のみ放送中）。（筆者注：傍点は筆者による）

また、昭和45年3月21日付読売新聞東京版朝刊の都民版には、この月の7日に赤坂東急ホテルにおいて、日本音楽著作権協会（吉田信常務理事）、日本音楽作家組合（藤田正人委員長）、日本詩人連盟（島田馨也常務理事）及び当番組スポンサーのシンポ工業株式会社（中溝二郎社長）の各代表が集まって「“なつメロ”普及につくした功績でスポンサーを表彰する催し」が開かれ、その席上において、楠木繁夫・三原純子夫妻の比翼塚を資金を出し合って建立することや、比翼塚建立で余ったお金で、歌手・作詞家・作曲家の老後を守る基金制度を作ることが話し合われたという。

以上を踏まえると、シンポ工業が単なるスポンサー企業ではなく、番組の制作に能動的に携わり、なつメロブームを支援していた実態が見えてくる。

なお、最終回の第478回音源においても「近畿放送のシンポの『この歌あの人』」と紹介されており、番組放送の全期間にわたって継続的にスポンサーを務めていたことが分かる。

3 企画構成者

企画構成者は、大阪府吹田市在住の木村孝雄である。前掲広中雅幸の記事に、番組放送開始直前の昭和43年初秋、番組制作の打ち合わせで広中と木村が初めて顔合わせを行った事実が記されていることと、最終回の第478回音源で「10年間の企画構成はシンポ工業の木村孝雄」と紹介されていることを考慮すると、番組放送の全期間にわたって木村が企画構成を務めていたことが分かる。

木村孝雄は昭和6年の生まれ。彼の自費制作LP同封④の「内容紹介」には、彼の氏名の後ろに「《シンポ工業（株）広告宣伝課長》」と記載されており、同社の社員であったことが分かる。

なお木村は昭和40年代～50年代にかけてポリドールのSP盤復刻LPを次々と自費制作しており、大のなつメロ愛好家であったようである。例えば、昭和54年9月27日付読売新聞東京版夕刊において、上原敏のLP全集を昭和51年から3年間かけてコツコツと第15巻まで完成させたことが報じられている。

4 放送期間及び放送内容

放送期間は大きく4つの区分に分けることができるため、前章の放送記録もこの区分ごとに記載した。

（1）第1回～142回

昭和43年11月（近畿放送は同年12月）～46年7月にかけて放送した。RKB毎日放送においては、昭和44年11月の第52回から放送を開始している。

司会は、元中部日本放送のアナウンサーで日本の民間放送で第一声を発した人物としても知られる宇井昇が務め、番組の特徴は以下のとおりであった。

物故歌手は関係者、現在歌手は御本人の話を聴きながら、レコードは原則としてオリジナルのSP。作詞、作曲の先生方にもスポットライトをあててということで、中山晋平作曲の「ゴンドラの唄」をテーマ音楽に、上原敏特集を第一回として、(後略)
[前掲宇井昇の記事(会報第6号)]

なつメロをオリジナルの原盤で聴き、織りなす人間模様を正確に伝えようという企画
[前掲宇井昇の記事(会報第19号)]

サブタイトルの多くがなつメロ関係者の名前となっており、流行歌そのものではなく人物にスポットを当てることに重点を置いていたと言える。また、なつメロ関係者は歌手ばかりでなく作詞者、作曲者の比率が高かったこともこの番組の特徴である。

特集ごとに異なるなつメロ関係者をスタジオに呼んで思い出話を聞きながら原盤のSPレコードを合間合間に流していくという番組構成であった。電話からなつメロ関係者が参加することもあった。

第140回～142回の最後の3回の放送は過去3年を振り返っての総集編となっており、近畿放送以外の3局ではいったん放送を終了する。第141回の近畿放送を紹介する京都新聞ラジオ欄では、「なお今の構成での「この歌・あの人」は、七月いっぱい終わるが、八月からは、新しい形式で「この歌・あの人」を送る予定。」[昭和46年7月20日付京都新聞朝刊]と紹介されている。

(2) 第143回～151回

昭和46年8月～9月にかけて近畿放送のみで放送した。

司会は当初引き続き宇井昇が務めていたが、途中で月原史郎に交代している。京都新聞のラジオ欄からは、第145回までは宇井昇、第147回以降は月原史郎であることが読み取れたが、第146回の司会がどちらであったのかの明記はなかった。しかしながら、第146回と147回のサブタイトルがともに「誰か故郷を想わざる」と同一であったため、第146回の司会者は月原史郎であったものと推測して67ページに記載した。

番組のサブタイトルが今までとは打って変わってキーワードとなっていることから推察できるように、「今までの人物中心で構成した内容を一新して、なつメロをジャンル別に分類して送る」[昭和46年8月3日付京都新聞夕刊]という番組構成に変わった。

ゲスト出演も皆無であったと思われる。

実際に放送音源を聞いたわけではないため推測に過ぎないが、「この歌あの人」という番組名にそぐわない内容に変わってしまったという感が否めない。

(3) 第152回～177回

昭和46年10月～47年3月(RKB毎日放送は同年4月)にかけて再び4局での放送を再開し、司会も宇井昇に戻っている。

サブタイトルもなつメロ関係者の名前に戻り、「ヒット曲の織りなす人間模様をさぐる」[昭和46年10月5日付京都新聞夕刊]という人物中心の構成に戻っている。

第177回は番組最終回という位置づけで、第1回放送時のゲスト出演者の島田馨也を招き、一曲目も第1回放送時の最初の曲「裏町人生」を流している。

第177回の近畿放送を紹介する京都新聞ラジオ欄では、「なお来週からは再放送の形でお送りする。」[昭和47年3月28日付京都新聞朝刊]と紹介されている。

(4) 第178回～478回

昭和47年3月の第177回が当番組の最終回であるという位置づけは、前掲宇井昇の記事(会報第19号及び22号)にも見られる。両記事において宇井昇は、3年半に渡る番組の重責から解き放たれた虚脱感とともに番組の思い出を感慨深く振り返っている。また、同じ会報第19号には、番組放送終了を記念して同年3月18日に東京で宇井昇への感謝の集いが催されたという記事も掲載されている。

それにもかかわらず、近畿放送のみではあるが、昭和47年4月以降も昭和53年3月までの長きにわたり放送が継続されている。

司会者は、79ページに書いたとおりの変遷をたどっている。ただし、最初の第178回～181回までについては、いずれも過去の再放送であったものと思われる。

京都新聞ラジオ欄の記事からの推測に過ぎないが、この時期の放送は、宇井昇が司会の時と、月原史郎または森一也司会の時とで大きく特徴が異なつたのではないと思われる。具体的には、宇井昇が司会の時は、4局放送の時と同様に、なつメロ関係者をスタジオに呼び、思い出話を聞きながら原盤のSPレコードを合間合間に流していくという番組構成であったものと推測されるのに対し、月原史郎や森一也が司会の時は、ゲストを呼ばず、あるいはゲストを呼ぶとしてもレコードコレクター等の非業界人であり、淡々と解説を交えながらレコードを流していくだけという番組構成だったように見受けられる。

なお、「2 地域別放送日時リスト」及び「3 放送記録」において第334回の記載がないのは以下の理由による。

- ・第273回の放送日が昭和49年1月29日であることを京都新聞ラジオ欄より特定。
- ・第335回の放送日が昭和50年4月1日であることを京都新聞ラジオ欄より特定。
- ・第274回～334回の放送日を埋めていくと、どうしても1回分はみでてしまい、やむを得ず第334回をリストから飛ばしたもの。

したがって、本誌において第274回～333回と表示した放送回のどこかでズレが生じているものと思われる。

5 番組と関連が深い商品

番組と関連が深い商品を3点紹介する。

(1) 『受難の世代』に捧ぐる あゝ愛おしの青春歌 東海林太郎・上原敏 名作選

既に何度も言及している、木村孝雄が自費制作したLP。ジャケット裏面の「自費制作の辞」によると、「大正初期から昭和4年ごろまでに生を受けた世代」を戦中戦後の厳しい時代を生き抜いた「受難の世代」とし、自費制作の意図を次のように述べている。

わたしはいま、一篇の歌をまとめ、せめてわたしのせまい身边から消えていった先輩たちへの追悼と、戦後の復興に破身した先輩諸氏への慰めの、ささやかな印としたい——これが、わたしの自費制作するゆえんである。

「ご存知『東海林太郎』と、今次大戦に南海の果てニューギニアで散華した名歌手『上原敏』のかくれた名作を、約 35 年ぶりに復刻した」LP となっている。

曲目は次表のとおりで、同LP同封②では、「戦後一度も復刻されていない曲ばかり」「名作でありながら、ほとんど入手しにくいレコードばかり」と紹介されている。

	A面 東海林太郎篇	B面 上原敏篇
1.	ハルピン旅愁	峠しぐれ
2.	青春夜曲	涙の親子旅
3.	南国の船唄	木曾の流れ唄
4.	人妻真珠	妻恋旅姿
5.	桐一葉	流離
6.	小諸追分	街の波止場
7.	黄昏道中	国境線万里

自費制作盤でありながら同LP同封②には、番組にゲスト出演している島田馨也（作詞家）や妻城光男（上原敏の司会者兼マネージャーを務めた人物）、番組の司会を務めた森一也（作曲者兼評論家）、番組プロデューサーの広中雅幸（ラジオ関東）といった人物が記事を寄せている他、同LP同封①でA面の東海林太郎篇の曲目解説を担当したのも、湯川容輔という東海林太郎の熱狂的なファンで、番組にゲスト出演したことのある人物であった。まさに番組関係者の全面的なバックアップの中で制作されたLPであると言える。



筆者所蔵

完成時期は、同LP同封②によると昭和49年6月上旬（同年4月2日付京都新聞夕刊では「五月末に完成の予定」と紹介されている。）で、完成直前の同年3月～4月の放送（第281回・282回）ではこのLPを使った特集が組まれた。また、同年7月15日発行のなつメロ愛好会会報第32号でもこのLPの紹介がなされている。

（2）わが思い出と歌ごころを語る 不滅の名歌手 東海林太郎

木村孝雄自費制作LP同封④に、この商品の「カセット頒布予約ごあんない」が以下のようにクレジットされている。

制作委託者 シンポ工業株式会社
 京都市（以下住所略）
 TEL 075-（以下電話番号略）
 制作受託者 株式会社 ラジオ関東音楽出版社
 （JASRACおよびポリドール・コロムビア・
 ビクターその他関係者の承認済）
 企画・構成 木村孝雄（シンポ工業）
 唄と語り 東海林太郎
 お相手 宇井昇

また、「このカセットは、予約制作実費頒布するもので一般のお店には販売しておりません。」との記載があり、申し込み方法は郵便振込票によるシンポ工業株式会社への口座振込と、同社広告宣伝課あての現金送金の2種類が指定されている。

同じ資料（木村孝雄自費制作LP同封④）中の同社取締役社長の中溝二郎による「ごあいさつ」では次のように紹介されている。

さて、かねてご愛聴の皆さまから熱望されておりました放送番組の「カセット」化について、当社では何とかご要望にお応えしたいと、この実現のため各方面と折衝してまいりましたが、今般関係各位のご協力により、第1篇制作が完了いたしました。

第1篇はとくにご要望の多かった東海林太郎集を企画、東海林さんご出演の13週の中から、その思い出と歌ごころのエキスを収録いたしております。

実物のカセットテープにも「シンポ工業株式会社」とのクレジットが入っており、ケースには「非売品」との表示がある。また、同じくケースには、「このテープに収録されたものは、ラジオ関東制作、シンポ工業提供の「この歌あの人」より再編集して制作したものです。」との表示もある。

曲目は次表のとおりで、各曲目の合間に東海林太郎と宇井昇の会話が挿入されている。また、A面の出だしは、オリジナルのSP音源で「国境の町」が2番まで歌われた後、シンポ工業の会社宣伝が収録されている。

収録時間は片面25分弱ずつで両面で50分弱。

	A面	B面
1.	赤城の子守唄	国境の町
2.	旅笠道中	湖底の故郷
3.	忠治子守唄	牡蠣の殻
4.	名月赤城山	出帆の夜
5.	麦と兵隊	人生航海

東海林太郎は存命中に当番組で計5回特集され、出演は計13回にわたるため、具体的に第何回の放送分から抜粋していったのかを特定することは困難であるが、B面の「牡蠣の殻」については、木村孝雄自費制作LP同封④の「内容紹介」に「この部分は、昭和47年1月放送分からとったもので、東海林太郎ラジオ出演の最後の録音となった。当日体調がすぐれず、声帯も荒れている」と記されている。



← ↑ B氏所蔵

(1) で紹介したLPと同様、制作に木村孝雄が携わってはいるものの、(1) のLPがあくまでも木村孝雄個人がプライベートで制作したSPレコード復刻品という体裁であるのに対し、こちらのカセットテープは、シンポ工業が会社として制作した商品という位置づけであり、番組で使われた音源を再編集した番組のダイジェスト品であった。

明確な制作時期は不明であるが、前掲中溝二郎の「ごあいさつ」の日付が「昭和49年春」と表示されていることから、(1) のLPと同じ時期に制作されたものと思われる。また、「第2篇」以降のものが制作されたかどうかは不明である。

(3) 岡晴夫大いに語る

岡晴夫が亡くなって7年後の昭和52年、長年暮らした千葉県市川市の葛飾八幡宮境内

に岡の顕彰碑が建立されたが、これを記念して制作されたLPである。ジャケットの裏面には、岡の妻であった佐々木清子による、顕彰碑建立に対する感謝の言葉が「昭和五十二年六月」の日付で綴られており、続けて次のように記されている。

なお、お送りいたしますレコードは、岡が亡くなる一カ月前の昭和四十五年に、ラジオ関東に出演し、宇井^{のぼる}昇さんと、上原げんと先生の思い出ばなしを語っている録音テープから編集させていただいたものです。皆様の前で、お話をする機会の少なかった岡の話しぶりをお聞きいただければと思います。ラジオ関東様の御厚意により、レコード化いたしました。御一聴いただきますようお願い申し上げます。

また、LPレーベルには「岡晴夫記念碑建立にあたり 岡晴夫大いに語る ～ラジオ関東「あの唄、この人」より～」とクレジットされている。



C氏所蔵

曲目は次表のとおりで、A面の出だしでは「ゴンドラの唄」のメロディーが流れるのに合わせて、宇井昇による「過ぎ去りしものは皆美しく、繋がる思い出は懐かしいもの。人の子が生きて踏み越える哀感の讃歌に果てしなく繰り広げる命の踊り。そしてその陰にはいつもどこでも必ず歌がありました。呼びて帰らぬ過ぎにし青春の郷愁、『この歌あの人』という口上が添えられている。

収録時間はA面が11分強、B面が9分弱の両面で20分ほど。

	A面	B面
1.	東京の花売娘	東京の花売娘
2.	上海の花売り娘	逢いたかったぜ

収録時間が短いということもあるが、わずか4曲しか収録されておらず、メインは岡晴

4 番組解説

夫と宇井昇の語りにある。また、(2)の東海林太郎のカセットテープとは異なり、昭和45年3月の第71回～72回の放送分から抜粋して制作されたものであることが明確である。